

小学生と中学生における自尊感情の高低と学習意欲, 規範意識との関係

Relationship between self-esteem, motivation to learn and norm awareness
in elementary school and junior high school

兄 井 彰

須 崎 康 臣

Akira ANII

Yasuo SUSAKI

保健体育ユニット

島根大学

(令和3年9月30日受付, 令和3年12月23日受理)

抄 録

本研究は、発達段階と自尊感情によって規範意識と学習意欲の高さについて、2つの仮説を設定し、検討することを目的とした。仮説1では、小学生は中学生より自尊感情、規範意識、学習意欲が高いこととした。仮説2は、自尊感情が高い子どもは、自尊感情が低い子どもに比べて、学習意欲と規範意識が高い傾向にあることとした。調査対象者は小学生305名(4年生97名, 5年生91名, 6年生117名)と中学生216名(1年生81名, 2年生78名, 3年生57名)であった。調査内容は自尊感情尺度(桜井, 2000), 規範意識尺度(中谷, 1996), 学習意欲尺度(山下ほか, 1983)を用いた。分析では、自尊感情の高さから小学生と中学生を4つの群(L群, ML群, MH群, H群)に分類した。分析の結果、小学生は中学生に比べて自尊感情、規範意識、学習意欲が高いことが示された。また、自尊感情の高い小学生と中学生ほど、規範意識と学習意欲が高くなることが明らかにされた。このことから、仮説1と仮説2はおおむね支持され、規範意識と学習意欲の高さには、自尊感情が関係していることが考えられる。

1. はじめに

小学生から中学生にかけて、自尊感情と学習意欲、規範意識が低下することが指摘されている。自尊感情とは、「多くの自己評価的経験の積み重ねを通して形成された自己評価的な感情複合体」と定義される(榎本, 1998)。学習意欲とは、「種々の動機の中から学習への動機を選択して、これを目標とする能動的意思活動をおこさせるもの」とされている(下山ほか, 1983)。規範意識とは、「教室における規範やルールを守り、対人的に円滑な関係を持つとしようとする目標」である(中谷, 1996)。自尊感情と学習意欲、規範意識の低下の時期の一つとしては、小学校から中学校への学校移行期があると考えられる。Ogihara(2016)は、自尊感情の重要な要素である自分が好きという項目において、小学生から中学生にか

けて低下することを報告している。また、Robins et al. (2002)は、自尊感情が9歳から12歳群は13歳から17歳の群にかけて低くなることを明らかにしている。学習意欲に関して、兄井・須崎(2013)は、学習意欲の促進的な側面において小学生は中学生より高く、抑制的な側面において小学生は中学生より低いことを示している。規範意識に関して、山田ほか(2013)は、規範行動が小学校から中学校にかけて、学年が上がるにつれて得点が減少することを報告している。また、須崎ほか(2013)は、小学4年生から中学2年生までを対象に規範意識について検討を行っている。その結果、規範意識における向社会的目標は、男子において小学4年生と中学1年生は他の学年に比べて低く、女子において小学6年が中学1・2年より高く、また、女子においてのみ、中学生は小

学より規範遵守目標が低いことを明らかにしている。そして、廣岡・横矢（2006）は、小学生から高校生において、学年が上がるにつれて、学校内の規範意識が低下することを明らかにしている。このように、小学生から中学生への学校移行期に伴って、自尊感情と学習意欲、規範意識は低下する傾向にあることが考えられる。

ところで、自尊感情の高さは、学習時間や授業中の挙手・発言頻度といった望ましいとされる学習のあり方と関係することが報告されている（福岡県青少年アンビシャス運動推進室，2010）。また、伊藤（1994）は、自尊感情のレビューを通して、自尊感情の高さは、心理的不適応と関わる尺度と一貫した負の関係を有することを明らかにしている。一方で、自尊感情の高さが攻撃性と関係するといった望ましいことが明らかにされている。小寺・桂田（2020）は、大学生において自尊感情と攻撃性に負の相関関係を有しており、自尊感情が低いほど攻撃性が高くなることを明らかにしている。戸田・川村（2015）は、社会的スキルが低い生徒において、自尊感情が高く、自尊感情の変動性が高い場合、怒りと、感情発散、直接的攻撃が高いことを示している。このように、望ましいとされる自尊感情の高さが、不適応な行動と関係することが報告されている。このように自尊感情は、肯定的な関係と否定的な関係を有しており、その一貫した結果が得られていない現状がある。しかし、自尊感情の高さと学習場面の変数とは、肯定的な関係を有していると考えられており、自尊感情を高めるための取り組みが行われている（蘭，1992）。したがって、自尊感情の高さは、学習場面に関する変数とは肯定的な関係を有していることが考えられる。

以上のことから、本研究は、次の2つの仮説を検討することを目的に行う。仮説1としては、小学生は中学生より、自尊感情と学習意欲、規範意識が高い傾向にあることである。仮説2は、自尊感情が高い子どもは、自尊感情が低い子どもに比べて、学習意欲と規範意識が高い傾向にあることである。その際、自感情を平均値からの高低の2群に分類するのではなく、平均値と標準偏差を用いて4群に分類する。

2. 方法

2.1 分析対象者

分析対象者は、調査協力への同意が得られており、データに欠損がない福岡県下の小学生305名と中学生216名であった。内訳として、小学生は

4年生97名（男子37名、女子60名）、5年生91名（男子46名、女子45名）、6年生117名（男子59名、女子58名）であり、中学生は1年生81名（男子39名、女子42名）、2年生78名（男子40名、女子38名）、3年生57名（男子33名、女子24名）であった。調査は2010年11月から12月にかけて行われた。

2.2 手続き

調査の趣旨及び調査内容について、学校長に説明を行い、調査協力の得られた学校を対象とした。調査票は各クラスで配布され、その場で回収を行った。調査票には、調査内容が成績に影響することがないこと、個人を把握できないように処理することが明記された。調査は無記名形式で実施され、質問項目への回答をもって調査への協力を同意したものとした。

2.3 調査内容

2.3.1 自尊感情

桜井（2000）で邦訳されたRosenberg（1965）の自尊感情尺度を用いた。この尺度は、自分に対してこれでよい（good enough）と感じるような自分自身に対する肯定的感情の程度を測定するとされている。10項目からなり、回答は「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で求めた。計10項目の合計点を自尊感情得点とし、得点が高いほど自尊感情が高いことを意味する。

2.3.2 規範意識

規範意識尺度は中谷（1996）が作成した18項目を用いた。この尺度は、向社会的目標と規範遵守目標の2つの下位尺度から構成されている。向社会的目標とは、社会的、対人的な協力や援助を目標とするものである。また、規範遵守目標とは、教室における明示的あるいは暗黙のルールを守り、規範に従うことを目標とするものである。尺度の項目数は、向社会的目標が10項目、規範遵守目標が8項目であった。回答方法は、「いつもあてはまる」から「どんなときにもあてはまらない」までの5段階の評定で求めた。各下位尺度の合計得点を算出し、得点が高いほど各規範意識が高いことを意味する。

2.3.4 学習意欲

学習意欲尺度は4件法による山下ほか（1983）が作成した40項目を用いた。この尺度は、自主的学習態度、達成志向、責任感、従順性、自己評価、失敗回避傾向、持続性の欠如、学習価値観の欠如の8つの下位尺度から構成される尺度である。このうち、自主的学習態度、達成志向、責任

表1. 自尊感情の群と校種における学習意欲と規範意識の平均値（標準偏差）と分散分析結果

	小学生				中学生				主効果 校種	群	交互作用
	L群 n=52	ML群 n=96	MH群 n=109	H群 n=48	L群 n=30	ML群 n=72	MH群 n=80	H群 n=34			
促進傾向	59.5 (16.7)	70.6 (10.1)	77.9 (10.6)	83.5 (10.3)	60.7 (14.6)	65.2 (13.4)	65.2 (14.1)	70.3 (14.8)	37.41 *	25.18 *	7.13 *
抑制傾向	41.6 (9.8)	33.8 (7.8)	29.4 (7.6)	25.7 (8.6)	43.6 (8.2)	38.5 (8.6)	36.8 (8.7)	32.7 (7.3)	43.59 *	38.39 *	2.19
規範遵守目標	34.0 (8.0)	38.6 (6.6)	41.6 (5.3)	44.0 (5.5)	33.8 (6.8)	36.6 (6.1)	37.4 (6.7)	40.2 (6.8)	16.97 *	24.43 *	2.31
向社会的目標	28.4 (7.1)	32.0 (5.4)	33.9 (4.7)	34.5 (5.5)	29.0 (5.8)	31.0 (5.6)	30.6 (5.7)	32.0 (5.7)	8.42 *	10.08 *	2.79 *

* $p < .05$

感、従順性、自己評価は促進傾向にまとめられ、得点が高いほど望ましい態度であることを意味する。失敗回避傾向、持続性の欠如、学習価値観の欠如は、抑制傾向に分類され、得点が高いほど望ましくない態度であることを示す。回答は「まったくあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」の4件法で回答を求めた。分析には、促進傾向と抑制傾向の得点を算出した。

2. 4 分析

分析には、自尊感情を従属変数とし、校種を独立変数としたt検定を行った。また、従属変数を規範意識と学習意欲とし、校種と自尊感情の群を独立変数とした二要因分散分析を行った。分析には、SPSS (Ver.25) を用いて、有意水準は5%とした。

3. 結果

まず、小学生 ($M=26.3$, $SD=5.2$) と中学生 ($M=24.7$, $SD=4.8$) の自尊感情について、t検定を行った結果、小学生は中学生より有意に高い値が示された ($t(519) = 3.56$, $p < .05$)。次に、自尊感情の平均値と標準偏差から小学生と中学生を4つに区分した。区分は、平均値から標準偏差を引いた得点未満の群 (以下、「L群」と示す)、平均値から標準偏差を引いた得点の間の群 (以下、「ML群」と示す)、平均値から標準偏差を足した得点の間の群 (以下、「MH群」と示す)、平均値から標準偏差を足した得点を越える群 (以下、「H群」と示す) とした。その際、小学生は小学生の平均値と標準偏差を用いて、中学生は中学生の平均値と標準偏差から区分を行った。

分析の結果を表1に示す。促進傾向において交互作用が有意であった ($F(3, 513) = 7.13$, $p < .05$)。そのため、単純主効果の検定を行った結果、ML群 ($F(1, 513) = 7.37$, $p < .05$) と、MH群 ($F(1, 513) = 45.86$, $p < .05$)、H群 ($F(1, 513)$

$= 21.49$, $p < .05$) において小学生は中学生より得点が高いことが示された。また、小学生において ($F(3, 513) = 36.87$, $p < .05$)、MH群とH群はL群とML群より得点が高いことが示された。中学生において ($F(3, 513) = 3.02$, $p < .05$)、H群はL群より得点が高いことが示された。

抑制傾向において、校種の主効果 ($F(1, 513) = 43.59$, $p < .05$) と群の主効果 ($F(3, 513) = 38.39$, $p < .05$) が有意であった。多重比較の結果、全ての群間で有意な差が示されており、L群が最も有意に低く、H群が最も有意に高い値を示していた。また、小学生は中学生より得点が高いことが確かめられた。

規範遵守目標において、校種の主効果 ($F(1, 513) = 16.97$, $p < .05$) と群の主効果 ($F(3, 513) = 24.43$, $p < .05$) が有意であった。多重比較の結果、全ての群間で有意な差が示されており、H群が最も有意に低く、L群が最も有意に高い値を示していた。また、小学生は中学生より得点が高いことが示された。

向社会的目標において、交互作用が有意であった ($F(3, 513) = 2.79$, $p < .05$)。そのため、単純主効果の検定を行った結果、MH群 ($F(1, 513) = 16.56$, $p < .05$) とH群 ($F(1, 513) = 4.17$, $p < .05$) において小学生は中学生より得点が高いことが示された。また、小学生において ($F(3, 513) = 14.20$, $p < .05$)、L群は他のすべての群より得点が高いことが示された。

4. 考察

本研究は、小学生と中学生における自尊感情と学習意欲、規範意識の特徴を検討するために、2つの仮説を検討することを目的に行われた。小学生は中学生より、自尊感情と学習意欲、規範意識が高い傾向にあるといった仮説1は、支持される

結果が得られた。また、自尊感情が高い子どもは、自尊感情が低い子どもに比べて、学習意欲と規範意識が高い傾向にあるといった仮説2は、概ね仮説を支持する結果が得られた。

中学生は小学生より自尊感情 (Ogihara, 2016; Robins et al., 2002) と、学習意欲 (兄井・須崎, 2013)、規範意識 (廣岡・横矢, 2006; 須崎ほか, 2013; 山田ほか, 2013) が低くなることが報告されている。中学生が小学生に比べて、自尊感情と学習意欲、規範意識が低下する理由として、学校移行といった社会的変化が影響していると考えられる。Rosenberg (1986) は、自尊感情の変化には、小学校から中学校へと学校の文脈が大きく変化するためと示唆している。そして、荒木 (2007) は、この学校移行の影響について、小学校生活と中学校生活は内容だけではなく、質的にも違っているため、その違いの影響は大きいと指摘している。また、兄井・須崎 (2013) は、「小学校に比べて中学校では授業数の増加や授業内容の高度にもなるため、理解できずに学習へのつまずきが多くなると考えられる。そのため、学習に対する無力感が形成され、学習に対して抑制する傾向が高くなり、促進する傾向が低下する」と述べている。さらに、学校移行の影響のほかにも、佐藤ほか (2000) は、「児童期までの両親や社会から与えられた価値体系に疑問を持ち始める思春期には、自己価値の自信を示すと考えられる自尊感情が揺らぐ」ことを指摘している。そして、新井 (1998) は、学習意欲の低下は、「思春期に入ると、自我意識の問い直しの洗礼を受け、それまで強力であった学習意欲が衰退し、子どもはそれに代わって新たな学習意欲を選びとったり作り出していかなければならない」と述べている。加えて、規範行動の減少の理由として、新たな仲間関係の出現があり、その集団の規範が重要視されるため、校則などの一般的な規範が逸脱される可能性が指摘されている (山田ほか, 2013)。これらのことから、中学生は小学生に比べて、学校移行にともなって学習内容を含む環境が大きく変化してしまう。その環境に適応するための過程で、自己を見直す必要に迫られてしまう。その結果、中学生では、自尊感情と学習意欲が低下してしまうことが考えられる。また、中学生ではクラスメイトとの関係も密接になり、その関係の中で共有される規範が重要視されるため、教室内での規範意識が順守されにくくなったことが推察される。

仮説2は、おおむね仮説を支持する結果が得られたことから、自尊感情の高さは学習意欲と規範

意識と関係していることが考えられる。これは、自尊感情が、学習意欲と規範意識といった学習場面においては肯定的な関係を有することが考えられる。そのため、自尊感情の高さは、小学生と中学生の学習意欲と規範意識を把握するための重要な指標となりうることが考えられる。その際、考慮する点として、本研究は横断研究に基づくものであり、これらの因果的な関係は明らかにされていない。そのため、本研究の結果から自尊感情を高めることが、学習意欲や規範意識が育まれることを意味しない。今後は、自尊感情と学習意欲、規範意識との関係について検討を行う必要がある。

さらに、小学生において自尊感情の高さによって向社会的責任目標が異なることが示されたが、中学生では自尊感情の高さで有意な差は示されなかった。これは、小学生において、自尊感情の高さが社会的、対人的な協力や援助を目標である向社会的責任目標と関係するが、中学生において関係しないことが考えられる。中学生において、向社会的責任目標を有することができるかどうかは、クラスメイトへの協力や援助を行うためのスキルの高さに関連していることが考えられる。つまり、中学生では、自尊感情の高さではなく、自身にクラスメイトに対して協力や援助を行うためのスキルの高さによって、向社会的責任目標を有することができると考えられる。しかし、本研究では、社会的スキルを測定していないため、今後は、社会的スキルが自尊感情と向社会的責任目標との関係に及ぼす影響について検討を行う必要がある。

文献

兄井 彰・須崎康臣 (2013) 学習意欲尺度の信頼性及び妥当性の検討：学芸大式学習意欲検査 (1985) を用いて。教育実践研究, 21, 111-117.

新井邦二郎 (1998) 自己決定の発達と学習意欲の発達。筑波大学心理学研究, 20, 99-105.

荒木紀幸 (2007) 自尊感情。荒木紀幸 (編) 教育心理学の最先端：自尊感情の育成と学校生活の充実。あいり出版, pp.155-176.

榎本博明 (1998) 「自己」の心理学。サイエンス社, p.164.

福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2010) 子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究。福岡県青少年アンビシャス運動推進室特別レポート。

廣岡秀一・横矢祥代 (2006) 小学生・中学生・

高校生の規範意識と関連する要因の分析. 三重大学

教育学部研究紀要自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, 57, 111-120.

伊藤忠弘 (1994) 自尊心概念及び自尊心尺度の再検討. 東京大学教育学部紀要, 34, 207-215.

小寺健太・桂田恵美子 (2020) 攻撃性と自尊感情および愛着スタイルとの関連. 関西学院大学心理学研究, 46, 103-109.

中谷素之 (1996) 児童の社会的責任目標が学業達成に影響を及ぼすプロセス. 教育心理学研究, 44, 389-399.

Ogihara, Y. (2016) Age differences in self-linking in Japan: The developmental trajectory of self-esteem from elementary school of old age. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 7(1), 33-36.

蘭 千壽 (1992) セルフ・エスティームの変容と教育指導. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学: 自己価値の探求. ナカニシヤ出版. pp.200-226.

Robins, R. W., Trzesniewski, K. H., Gosling, S. D., & Tracy, J. L. (2002) Global self-esteem across the life span. *Psychology and Aging*, 17(3), 423-434.

Rosenberg, M. (1965) *Society and adolescent self-image*. Princeton University Press.

Rosenberg, M. (1986) *Self-concept from middle*

childhood though adolescence. In J. Suls & A. G. Greenwald(Eds.) *Psychological Perspectives on the self*, Vol.3. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, 107-136.

桜井茂男 (2000) ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.

佐藤逸子・杉原一昭・藤生秀行 (2000) 女子中学生の自尊感情と自己評価意識についての短期縦断的研究. *カウンセリング研究*, 33, 57-68.

須崎康臣・兄井 彰・杉山佳生 (2013) 児童・生徒用社会的責任目標尺度の検討. *健康科学*, 35, 45-50.

下山 剛・林 幸範・今林俊一・黒木眞由子・塚田洋二・宮本光博・曾我部和弘・大塚敬吾・前原辰信 (1983) 学習意欲の構造に関する研究 (2) 学習意欲の類型化の検討-. *東京学芸大学紀要1部門*, 34, 139-152.

戸田弘二・川村 遼 (2015) 中学生における自尊感情の変動性と攻撃との関連: 社会的スキルの緩衝効果. *北海道心理学研究*, 38, 1-14.

山田洋平・小泉令三・中山和彦・宮原紀子 (2013) 小中学生用規範行動自己評定尺度の開発と規範行動の発達の变化. *教育心理学研究*, 61, 387-397.

